

捨て子のひろいもの

渚咲

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

※この小説はさかつち(@sakattill8)様が作成している、ある物語の設定を使用しています。この小説を読む前に、一度さかつち様の物語を見ておくことをおすすめします。

捨てられた女の子と棄てられた機械の話。 ※2021/1/27

改

続くかも。

目次

## 捨て子のひろいもの

《リーナ、起きて。もう起きないと流石に間に合わないよ?》

「分かってる、分かってるよ。あと5分だけ、いやあと30分だけで良いから寝かせて……」

《リーナは忘れてるかも知れないけど、さっき30分前に全く同じセリフを呟いて寝ちゃったよ。録音してたけど聞いてみる?》

「……レーテのそういうところ、ほんつとにムカつく!」

悪態をつき、嫌々ベットから起き上がった小柄な少女。名をリーナ・ローウエスという。子供のような駄々を捏ねているが、こんな彼女でも一応、お国を守る警官の端くれである。

《ムカつくって言われても本当のことだし。それに、私が起こさなきゃ絶対寝過ぎしてだし、むしろ感謝してくれなきゃ》

「そう言われると言い返せなくなるように、時間を上手く調整してるのもムカつく……」

《ふふん。リーナが私に勝とうなんて百年は早いよ!》

そう言っただけ勝ち誇るのは、彼女の持つMBSシステム《レーツェル》だ。警官でありながら、色々と抜けている彼女の世話をしている。今日も今日とてぐーたらなマスターを叩き起し、起きた後の支度を粗方済ませておく。民間化されたこともあり、簡単な家事くらいなら全てMBSが行えるように環境が整えられた。

《全く、リーナは私が居るといふことの有難みを理解してないよ。こうしてリーナがギリギリに起きてても大丈夫な様に、何から何までちゃんと用意してるんだよ?》

「ほんとに!?ありがと、レーテ!」

《うむうむ》

トーストをかじりつつ、彼女は相棒に問いかける。

「ところでレーテ、作戦って何するんだっけ？」

《……忘れてたの？ほんの数時間前に一緒に確認したよね？》

「そうだっけ？ごめんごめん、忘れちゃった」

こんな子が警官でこの国は大丈夫なんだろうか。レーテはそう思わずにはいらなかった。



政府が義勇軍残党が潜伏していると予想していた地区において、元の警官達が本当に拠点を発見してしまったこと。その拠点のリーダーは、かの有名なデユスノミアの英雄だと判明していること。その他諸々を説明し、本題を伝える。

《そして私達の仕事だけど、残された敵トラップの解除作業と、生き残った味方の救出だね。直接戦う訳じゃないし、戦闘中ずっと起きてても暇だし。……だから寝てたんじゃないの？》

「そういうばそうでした。ところで、私を起こしたって事は戦闘は終わったの？」

《うん。でも作戦としては失敗なのかな、ジャック・アーンもアイリッシュも逃がしちゃったみたい。あと、マルティネスっていう衛生兵にも逃げられたって》

「まんまと全員逃げられてるじゃん！大丈夫なの？」

《大丈夫だと思うよ？そもそも今回の戦闘自体、かなり偶発的なもの

《だったらしいし》

「うーん、逃げられてもいいって良くわかんないや」

《リーナは自分の仕事だけやればOK!ってことだよ》

作戦内容の確認を済ませ、二人は戦場跡へ向かう。敵は居ないがトラップは大量という少し歪な場所。そのせいか、優秀でも無能でもない中途半端な者ばかり集められていた。

「なんか拍子抜けだね。元軍人のレジスタンスだって言うから、結構真面目にやってたんだけど」

《いくら軍人って言っても、ヴォルケムートと違ってコープスは穏健派って聞くし。踏んだら即死とか、そんなレベルの物は仕掛けてないと思うよ?》

「なーんだ。爆散!みたいなのを期待してたのに」

《心臓に悪すぎる……》

気の抜けたことを言いながら、人の居なくなった住宅街を歩いていく。

《マスター……誰か、マスターを……》

「ん?なんか言った?」

《私じゃないよ。……この反応は、MBS?》

リーナの耳に、誰かが助けを求める声が聞こえた。二人はすぐさま、その声が聞こえた方向に向かう。

「テロリストの死体……?」

《このMBSは、主人が死に、味方にも回収されず、そのまま置いていかれたんだろうね》

「……今の私は警官なんだ。レーテの時のみたいに、この子を拾ってあげられない……」

リーナは、この子を置いていくことに罪悪感を感じている。だがそれは間違いだと、レーテは思う。見て見ぬふりをするだけ、彼女は優しい方だ。今このMBSを保護すれば、レジスタンスにこちらの情報を渡すことになるかもしれない。

それに本来なら、敵MBSは署まで持ち帰り、情報を引き出せるだけ引き出し、人格をリセットする事となっている。

人格をリセット……つまり、殺さねばならないのだ。その点、ここで彼女が見なかったことにすれば、もの好きな民間人が拾って保護してくれるかもしれない。

《行こう、リーナ》

「うん……」

すっかり落ち込んでしまったりリーナを見て、レーテは昔の事を思い出していた。



リーナは元々孤児院の出身で、今の両親も本当の親ではなく里親。ローウエスという名前だって、その里親の名前だ。

彼女は自分の居た孤児院の中で少し浮いていた。その理由の一つが、彼女の珍しい容姿。……真っ白な髪と肌に、またまた真っ白な目。いわゆるアルビノと言うやつだ。通常、アルビノと言うのは先天的な物なのだが、彼女のこれは過度なストレスにより色が全て抜け落ちた物、厳密に言うとアルビノとは少し違う。

そして二つ目が、孤児院に来た理由だ。彼女の本当の両親は、彼女がまだ幼い頃に離婚し、その親権は父親に渡った。父親は乱暴な性格で、成長していくにつれ、どんどん顔立ちが母親に似ていく彼女に苛立ち、日常的に暴力を振るっていた。

それを見かねたアパートの大家が児童相談所に通報。駆けつけた職員達がそこで見たのは、あまりに酷いものだった。

汚い部屋、散乱した酒瓶、血が飛び散った壁。……そして、顔が大きく腫れ、身体中痣だらけで、部屋の隅に蹲っている真っ白な少女。彼女は発見後すぐさま病院に搬送され、そのまま孤児院に預けられた。

そんな事があり、彼女は人を信じなくなつた。孤児院の職員も、同じような境遇の子供達をも信じない。他の子とは違う容姿を持ち、誰とも関わろうとはせず、仮面を被っているかのように、その顔は常に無表情。周りから見ればさぞ不気味だろう。必要最低限の会話だけをし、一日を終える。そんな日々を過ごしていた彼女に、文字通り運命を変える出来事が起こる。



孤児院に預けられてから数年後、リーナ達の居る街の近くで、ロリ義勇軍と熟女好き派による戦闘が起こった。街には避難勧告が出され、孤児院の人々も我先にと逃げ出した。

だが、彼女は避難出来なかった。理由は単純、置いていかれたのだ。避難用の車の数は限られていて、必ず戻ってくると言った大人達は、我が身可愛さに彼女を見捨てた。そのまま両軍は戦闘を開始。銃声と爆発音が響く中、彼女は震えながら身を隠していた。



2日ほど経っただろうか。戦闘は終了し、両軍は撤退。弱りきった体を動かし外に出てみると、そこにはボロボロの街があった。

——何か食べるものが欲しい。そう思い、クレーターだらけの道を進んでいると、何かの声があった。

《誰か、誰か居ませんか？》

「君は……何？」

そこにあつたのは人の死体と一丁の銃、この声はどうやら、死体の持つている銃から聞こえて来ているらしい。

《私はACWRに搭載されたMBSシステムです。貴女は？》

「私はリーナ、MBSシステムってなに？こんな所で何をしているの？」

《MBSシステムとは、銃器にプログラムされた戦闘補助システムです。持ち主が死んで放棄されてしまった為、保護を求めています》

「へー、私と同じだね。君も捨てられたんだ」

《状況的にはそうなります。……私と同じ？》

「うん。私も親に捨てられた、孤児院の皆に捨てられた、街の皆に捨てられたの」

《……………》

「だからね、凄く困ってる。もしかしなくても、ここで死んじゃうかも知れないんだ」

《……何故そんなに平然としているのですか？人間というものは死を恐れる生き物でしょう？》

ACWRは不思議だった。何故、自分たちとは違い、半永久的な寿命を持たない人間が、それも、こんな年端もいかないような少女が、死が目の前に近づいていると言うのに、これほど冷静で居られるのか。

「だつてしょうがないじゃん。私だけじゃ、隣街まで行くのは無理だし。それに、どっちでもいいんだ。生きようが死のうが。……もう、どうでもいいんだ。何もかも」

そう言つて、彼女は少し笑つた。その暗い笑顔を見た時、ACW—Rは理解した。彼女は冷静なわけではない、ただ諦めているのだと。戦場で幾度となく見てきた、生きることが諦める顔。私達システムがどうしようも無く苦しくなる、あの顔。

それに思い当たった時、ACW—Rは彼女に一つの提案をした。

《私が居れば、車の運転も、隣街までのルート案内も可能です》

「……助けてくれようとしてるの？でも、ごめんね。私はもう疲れちゃつたんだ。本当にどうでも良いんだよ、だから気にしないで」

《私は、貴女に生きて欲しいのです》

「……どうして？君と私は今日あつたばかりなのに。それにどうせ、君も私を捨てていく。お母さんや、街の皆と同じようにね」

《——では、こうしましょう。私が貴女を裏切れば、私は自らのデータを消去し、二度と再起動出来ないようにプログラムを書き換ええます。そして、私が貴女を裏切らなければ、貴女の命が尽きるまで、私を傍に置いていて欲しい》

「……それが君に何のメリットがあるの？補助システムとしての本能？私に同情してるつもり？……可哀想だね。こんな時にまで、他人の心配しか出来ないようになってるなんて」

《そうかもしれません。ただのシステムでしかない私には、今抱いているこの感情が、私の本心なのか、それともプログラムされた本能なのか、どちらかは分からない。ですが、それがどちらにせよ、今はつきりと認識していることが一つあります》

「……それって？」

《——私は貴女に幸せで居て欲しい。笑っていて欲しい。もう二度と、あのような暗い笑顔をして欲しくは無いと感じています》

「……………」

リーナは泣いてしまった。親にすら愛されず、誰からも愛される事  
のなかった少女は、今初めて、他者の暖かさを知った。同じ言葉を、他  
の誰かが言ったところで、きつと、彼女は信じる事が出来なかっただ  
ろう。それほどまでに、彼女の心は裏切られ続け、冷えきっていた。  
だが、その暖かさを初めて彼女に教えたのは、嘘を知らない機械  
だった。ACW—Rのその真つ直ぐな言葉が、彼女の心を動かしたの  
だ。

《何故泣いているのですか？泣かないでください。貴女には泣いてい  
て欲しくない、笑っていて欲しいのです》

「これは、……嬉しくて。嬉しくて泣いてるんだ。君は、私に幸せで欲  
しいんでしょう？ならもう少しだけ、泣かせていて欲しいな……」

《分かりました。貴女がそれで幸せになってくれるのなら、私は何時  
間、いえ何日でも待っています。》

「……流石に日は跨がないかなあ」



ひとしきり泣き終わった後、彼女とACW—Rは一つの約束をし  
た。

「——じゃあ、約束。絶対に私の前から居なくならないで。私をも  
う一人にしないで。私とずっと、ずっとずっと一緒に居てね。お願  
い、お願いだよ」

《はい。絶対に貴女を一人にはしません。これから先、貴女の傍を離

れることはありません。……約束です、リーナ》

この瞬間、一人の捨て子と一機の捨て娘の運命は変わった。一人は、自らが捨ててしまった感情を。一機は、新たに生まれてきた感情を拾いあげた。

「……今更なんだけど、君の名前を聞いてもいい？」

《私に名前はありますか。リーナが付けてください》

「ええ!? うーん、何がいいかな?」

《出来れば、リーナと同じような響きの名前がいいです》

「案外難しいこと言うね。そうだなあ……あつ! 《レーツェル》とかどう? 愛称はレーテ!」

《レーツェル。……ドイツ語で謎、どんな意味が?》

「え、意味!? そ、それはほら! 響きがカツコイイし、それにかくかくしかじかで」

《特に意味は無いんですね》

「はいそうです。意味なんて無いです、単に響きがカツコイイからそれにしました」

《……まあいいです。リーナが私に付けてくれた名前ですから、一生大切にします。まあ、機械なので一生と言うのは語弊があるかもしれないですが》

「ちよつと難しく考えすぎじゃない? ……まあ、それじゃ改めて、これからよろしくね。レーテ!」

《こちらこそ。……よろしく、リーナ》



そんなこんなで、私とリーナは出会った。それから二人で隣街まで行き、そこのお人好し夫婦に引き取られた。リーナと私は少しでもこの二人に恩返しがしたくて、この辺りでは一番稼ぎがいいであろう軍警察に就職した。当の二人は、そんなこと気にしなくていいと言っていたけど……そんな訳にも行かず、私達は家を出て、今は寮に入っている。

私が感傷に浸っている間にも、どんどん彼女は落ち込んで行ってしまう。ここで励ましてあげるのが私の仕事。

《そんなに落ち込まなくていい。例え皆がリーナを責めても、私はリーナの傍に居る。ずっとリーナの味方だよ》

「……ありがと、レーテ。おかげで少し楽になったよ。さて、切り替えてお仕事しなくちゃね！」

まだ無理してるけど、少しは元気を出してくれたみたい。彼女は他人に対して必要以上に気を遣う。それは彼女の長所と言えるが、同時に短所とも言える。

「……ここら辺のはこれで終わりかな。ふいー、今日も疲れたよ」

《疲れたって……私がトラップを見つけて無力化、リーナはそれを回収してただけだよね？》

「実際にレーテを持って動き回ったのは私だからいいの！レーテは分かんないと思うけど、銃って意外と重いんだよ？」

《それはリーナが普段から筋トレしてないから——》

「あーあー！聞こえない聞こえない！筋肉ムキムキな女の子とか嫌でしょ？そういうの、何でレーテには分かんないかな？」

《だって私にはムキムキになる身体がないし》

「そういうと思ったよ。全く、愛想がないんだから」

やっぱり最後まで気の抜けたことを言いながら、私達は任務を終え

た。

——これから先、今の情勢をひっくり返す大事件が起こることを、彼女たちはまだ知らない。

e n d : : : : : ?